巻頭特集

まだ語られていない風景の一瞬を切り取る

別所隆弘さん

大津市民にとっては見慣れた琵琶湖の風景。四季折々の変化に、ときに意識を向けることはあっても、日々の暮らしの中で関心度は低い。そんな私たちに、別所隆弘さんの写真は「琵琶湖はこんな表情も見せるんだ」と驚きと感動を与えてくれる。「アラウンド・ザ・レイク」をテーマに掲げ、琵琶湖を中心とした滋賀県を撮り続けるフォトグラファー、別所さんに話を聞いた。

原点となった写真は比叡山からの大津市の夜景

カメラとの出合いは大学院時代にさかのぼる。マーク・トウェインの旅行記を研究していた別所隆弘さんは、トウェインが発明されて間もないカメラに関心を持っていたことを知って、興味を引かれていた。研究室に後輩が自慢げに持参したカメラにも触発され、2012年の春、本格的なデジタル一眼レフカメラ「ニコンD800」を手に入れる。当時、実家の改修工事で水漏れが発生し、所蔵のCDや書籍が被害に遭った。その補償金50万円で購入したという。

販売店からの帰り道、ふと思いついて比叡山の展望台にのぼり、大津市の夜景を撮影した。拡大してみると、自分が通っていた小学校や中学校、高校、さらには自宅マンションまで写り込んでいた。圧倒的な解像度、描写力に衝撃を受けるとともに、そこには今まで知らなかった故郷の景色があった。これがきっかけとなり、滋賀の風景を撮り始めた。

「高価なカメラなら、ずっと趣味として楽しめるのでは、と衝動買いでした。ただ関西人ですから、元を取らねばと撮り続けているうちにハマってしまいました」と振り返る。

SNSがなかったら写真家になっていなかった

当初は、海外のサイトやフェイスブックに写真をアップしていた。日本最大の審査制写真投稿サイト「東京カメラ部」を知り、投稿を始める。毎年、投稿された何十万もの写真から10作品が選ばれる「10選」に、高島市のメタセコイア並木の写真が輝く。

夜の伊丹空港で撮った飛行機の写真をツイッターにあげたところ、わずか500人ほどだったフォロワーが48時間で1万人に、1週間後には2万人に膨れあがった。

「元々はSNSの活用を含め、楽しみだけで写真をやっていました。それらを見た方々からオファーをいただくことが増え、仕事として写真に携わるようになったのです。自治体や企業からの依頼には託された思いがあって、使命感からも2017年1月1日、プロフォトグラファーの道に踏み出しました」

湖面に風景が映り込む余呉湖や、紅葉が彩る鶏足寺参道の写真は反響も大きく、観光客を倍増させた。そんな写真の力や可能性を意識しつつ、撮影に臨んでいるという。

琵琶湖は最高の被写体だが単体で撮るのは難しい

別所さんには大事にしている被写体がある。ひとつは母校の長等小学校横、琵琶湖疎水の桜並木だ。幼稚園が別の学区だったため、入学しても友だちがいない。辛くて教室をたびたび抜け出した。追いかけてきた教師に捕まるのが、いつもこの桜並木だった。

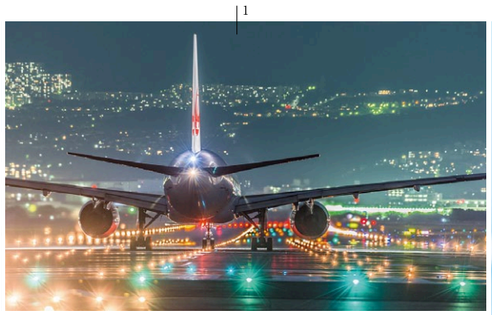
もうひとつが琵琶湖花火大会。第1回開催時、両親に連れられて会場に向かう道中、ビルとビルの間から花火が見えた瞬間の感動を、今も鮮明に覚えているそうだ。

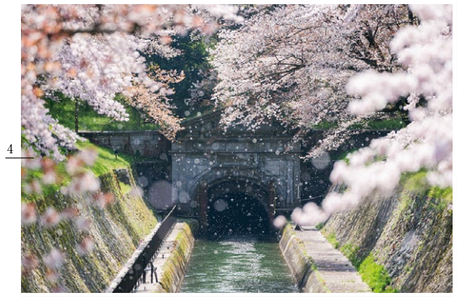
「この2つは、だれよりも綺麗に撮りたいと思っています。ぼくのライフワークです」

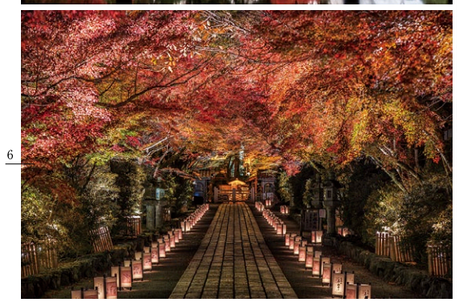
幼い頃に刷り込まれた故郷の美しい風景が誘うかのように、別所さんは琵琶湖を中心に滋賀の風景を写真に収めていく。滋賀は被写体の宝庫で、中でも琵琶湖は最高と話す。

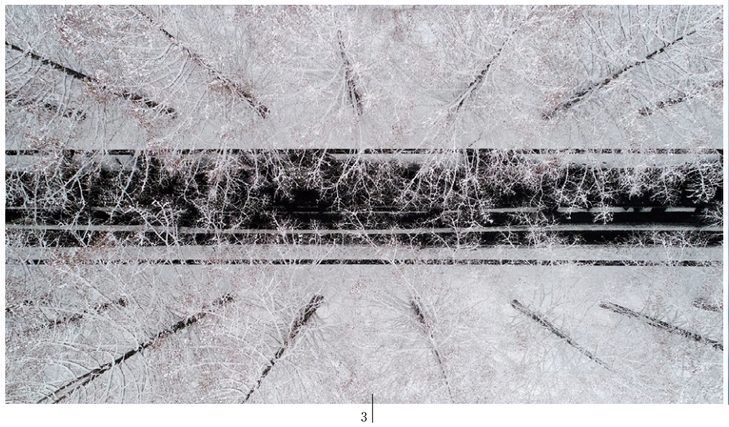
「琵琶湖は魅力的な被写体ですが、単体で撮るとなると、広くて平たくて立体感がないので難しいんですね。たとえば三上山など、ワンポイントを背景に置くなどして、サイズ感や広がりを伝えられる工夫を凝らします。ひとと同じ風には撮りたくない、ということだわりがあって、現像も美しく仕上げることを心がけています」

今年の7月5日、スマホで近所の信号機を撮影し、「これから世界が終わる暑い夏の日みたいになってしまった」とアップしたら、23万「いいね」を得た









1.ツイッターにアップした飛行機の写真。フォロワーが一気に増えて、別所さんの認知度を押し上げた　2.琵琶湖上のダウンバーストの写真。右横に見える高い建物は「びわ湖大津プリンスホテル」で、積乱雲の大きさが実感できる　3.ドローンを使って、冬のメタセコイアの並木を上空から撮影。『ナショナル・ジオグラフィック』の2017年コンテストで2位を獲得した写真　4.桜の名所としても知られる、長等小学校近くの琵琶湖疎水。毎年欠かさず撮影を繰り返し、やっと思い描いていた写真が撮れたという。別所さんお気に入りの1枚　5.別所さんに教えてもらった、紅葉シーズンの市内のおすすめ撮影スポットその1、坂本の旧竹林院。1階にはテーブルがあり、カメラをテーブルに置いて撮影すると、リフレクションが映える1枚に　6.おすすめ撮影スポットその2、石山寺。約2000本の紅葉が、寺名の由来となった天然記念物の硅灰岩や建造物を鮮やかに彩る。秋の石山寺を訪れる際はぜひ本誌を片手に、P4の「石山エリア再発見！ ぶらさんぽ」をチェックしながら歩いてみて

写真と文学の融合などメディア間の垣根を越えて

本来の仕事は大学の講師で、現在も教壇に立っている。専門はアメリカ文学で、大学院では「表象研究」をテーマにしていた。文学研究者の視点が撮影する際に介在するのか、別所さんが撮る風景には、少なからず物語が潜んでいるように見える。

「写真と文字は、メディアとしては別のものです。ただ最近は、メディアを区分けしてきた垣根が低くなってきたように感じます。SNSの拡大で、写真も動画も文字も垣根を跳び越え、新たな表現形式のフィールドが広がっていくのでは」

その試みとして別所さんは近年、「TikTok（ティックトック）」や「Reels（リール）」などに、ショートムービーを投稿し始めた。かつては動画の編集に手間がかかったが、今ではスマホでも可能になった。カメラには高画質の4K動画を撮影する機能まで付いている。10秒ほどの動画であれば、写真と同じく1カットでの撮影となり、写真の延長線上にあるともいえるだろう。

「今、第一線にある40代のぼくたちがいろいろと挑戦することで、次の世代のひとたちが活躍できる素地をつくっていけたらな、と思っています」

profile

別所隆弘さん

Takahiro Bessyo

1979年大津市生まれ。プロフォトグラファー兼アメリカ文学研究者。世界的な写真誌『ナショナル・ジオグラフィック』の2017年コンテストで2位に選出されるなど、国内外の写真賞を多く受賞。著書『最高の一枚を写し出す写真術』のほか、共著も多数。愛用のカメラは「ソニーα7R4」で、スナップ用として「ライカQ」を持ち歩くことが多い

information

[web] https://www.takahirobessho.com

[Instagram] https://www.instagram.com/takahiro_bessho/

[Twitter] https://twitter.com/TakahiroBessho

文／長屋整徳　写真撮影／延原正人　写真提供／別所隆弘さん　デザイン／chica